

ご挨拶

日本行動分析学会第28回年次大会を神戸親和女子大学で開催できますことを、とても光栄に感じています。創立されて以来120余年の歴史を持つ親和学園ですが、神戸親和女子大学の開設は1966年、学生総数も2学部4学科に大学院を含めても2000人足らずの小規模校です。この大会をきっかけとして、「しんな」という愛称と共に本学を広く知っていただければ嬉しく思います。今年度の大会は、ケーゲル先生の招聘を始め、大会会場の提供など神戸親和女子大学の全面的な協力を得て、共催という形で開催いたします。

児童教育学科が本学では最も大きな学科です。また、併設の通信教育部で平行して学ぶことで他学科の学生も幼稚園・小学校の教員免許が取得できるようになっています。このように、本学の特徴が「教育、児童教育」にあることから、今大会のテーマを「教育場面における子どもたちとの関わり」としました。発達障がいと応用行動分析との関わりは言うに及ばず、通常学級でも行動分析学が果たす役割は小さくありません。ともすれば、誤解されがちな行動分析学に基づいた子どもたちへの関わりの姿を、子どもたちと直接関わる仕事に携わる方々にご出席いただいて、大会企画シンポジウムとして取り上げます。

例年7～9月に開催されていた年次大会の日程が、諸般の事情で今年度は10月9、10日と例外的に遅い時期になりました。また、本学でも祝祭日であっても月曜日に通常授業が行われることから、教育セッションを大会会期と別途11日(月・祝)の午前中に設定しなければならぬなど、会員の皆様にはさまざまなご不便をおかけして申し訳なく思っています。

そのような状況にもかかわらず、自主企画シンポジウムが3件、口頭発表が11件、そしてポスター発表が93件とこれまでの大会に十分比肩する参加のお申し込みをいただくことができました。また予約参加のお申し込み総数も、非会員23名を含めて192名を数え、懇親会への予約参加者数も80名を越えました。また、今大会より、非会員であっても、筆頭発表者として(正会員が責任発表者として連名となる必要がありますが)、発表できるようになったことも書き留めておく必要があるかと思えます。

さて、先例を見ない暑さが続いた夏の終わりに、本当に悲しいニュースがありました。日本に行動分析学を広めた佐藤方哉先生の訃報です。慶應義塾大学をご退職後も、帝京大学、星槎大学で、精力的な研究の傍ら、数多くの後進を育てられました。日本行動分析学会の企画として、佐藤方哉先生を偲ぶスペースを準備いたしました。

「21世紀は行動分析学の時代である」という佐藤方哉先生の思いが実りを見せていることを映すように、今大会でも前述のように数多くの若手を含むポスター・口頭発表を聞くことができます。また、近年の特別支援教育への注目は、時代が行動分析学の歩みに追いついてきたひとつの証左と見ることもできるかもしれません。5つのシンポジウム、そして前述のように神戸親和女子大学の支援を得て招聘が叶ったケーゲル先生によるワークショップ、新企画のトークライブへもご参加下さい。同じくこの夏に亡くなられたロヴァース先生の思い出もケーゲル先生と中野良顕先生に懇親会でお話しいただく予定です。

自然に溢れる神戸のもうひとつの姿である山の中で数多くの先生方とお目にかかれるのを楽しみにしています。

2010年9月

日本行動分析学会第28回年次大会実行委員会
委員長 吉野俊彦